

県立図書館のACC文庫をめぐって

今 まど子

横浜は、一九四五（昭和二十）年五月二十九日の大空襲で焦土と化し、数日後に横須賀線から見た、黒々とした焼け野原が東京湾まで広がり所々まだ赤く火を含んだ低いビルがそこそこに躊躇るように点在していた情景は、今も思い出出すことができる。

横浜には第八軍の司令部が置かれ、司令官はアイケルバーガー中将だった。第八軍は道府県に軍政部を置いて、マッカーサー元帥の総司令部（GHQ）が日本政府を通して行う占領行政が国中に行き渡るように地方レベルで監視し、指導するのが地方軍政部であった。

横浜には神奈川県軍政部があって、その中の民間情報課（CI）が図書館行政を担当し、一九四七年から四八年にかけ

て神奈川県内の市町村に図書館の設置を奨励した。担当官だったのは女の兵隊さんでマーガレット・ヘンセルといい、「体が大きくて、あまりきれいでない、カバさんみたい」^①だったそうだが、ジープで県内を走り回り、民主主義を普及させるための拠点となる図書館の必要性を自治体の担当者に説き、カマボコ兵舎を提供して、県内十数カ所に軍政部の読書室を設置していった。半円形のカマボコ形をした建物は、図書館としては二十七坪と小規模であったが、内部は開架式書架に図書や雑誌が並べられ、日本人に対して貸出しサービスが行われていた。

一方、GHQの中に民間情報教育局（CIE）があった。CIEの中にも情報部があって全国レベルで図書館サービ

スを提供していた。日本人の間ではCIE図書館とよばれていたが、CIEインフォメーション・センターというのが正式名称であった。

四五年十一月十五日、最初のインフォメーション・センターが内幸町の旧NHKビルにオープンしたが、直ぐに手狭となって日比谷に移転した。館長はパーネット中尉でプロのライブラリアンであったが、四六年九月軍務が満了し大尉になって帰国した。その後マルハウザー大尉がGHQ統計・資料局の図書室長から異動して来た。マルハウザーは人口二十万人以上の市に図書館を設置する計画を立て次々に実行に移し、最終的には五一年六月十四日に二十三館目のCIEインフォメーション・センターが北九州にオープンした。

横浜CIEインフォメーション・センターの開館式は四八年八月三十一日に行われ、十四番目のセンターであった。場所は、海員会館（横浜市中区北仲通六一六十六）、初代館長は、新潟センターから異動して来たヘレン・ウッドさ

ん、ベテランのライブラリアンであった。

開館当初は、図書約三千冊、雑誌二百種、パンフレット約二千点、他に楽譜、レコード、スライド、フィルム・ストリップ、短編映画フィルムなどを所蔵していた⁽²⁾が、すべて開架で書架に並べられ、次の年から貸出しを開始した。利用は無料であった。レファレンス・サービスは早々に開始していた。児童コーナーも設けられ児童書が並び、十月二日からお話会も始まった。占領政策の一つに婦人の解放があったので、婦人コーナーを設けファッション雑誌を置いたところ若い女性が群がって、薄い紙を持ってきてしゃれたデザインを写し取るなど、雑誌は引つ張り風だった。また、市内の洋裁学校に呼びかけてファッション・ショーを開き、ピアノの伴奏も入って、生徒達は自作のドレスをまもって披露し、二百八十人もの観客があつて興奮した一日だったという記録がある。ウッド館長は、何種類かのファッション雑誌を観客に紹介するのを忘れなかった。

四九年八月、センター開館一周年の利用状況⁽³⁾は、男性

が七十四%、女性が二十六%。今ならこの数字は逆転するであろう。職業別では学生が五十五%、ビジネスマン十二%、科学技術者七%、公務員七%など。読書傾向は、科学技術関係三四・四%、芸術一五・二%、文学二二・六%、経済一〇・一%などであった。戦争で長いこと外国の学術雑誌が輸入できず、情報が遮断されていたため、センターに置かれる医学、薬学、農学、科学技術の新刊雑誌には学者、研究者の列ができたと言う。コピー機がない時代であったから、ノートを取っている人の隣に次の人がびったりくっついて座り、順番を待ったという。五一年六月三十日の数字だが、蔵書は図書一万二千二十一冊、雑誌約五百タイトル、他に映画フィルム約五百巻、レコード約五百枚に増えていた。図書館の利用者は、開館から五一年六月三十日までの二年十ヵ月でのべ四十六万八千五百人が足を運んだ。この数字に講演会や映画会、コンサートの参加者数は含まれていない。

資料は所蔵しているだけでなく、所蔵しているフィルム

を使用して映画会、レコード・コンサート、スライド・ショーなどを開いた。レコード・コンサートを聞く前にはセンターの常連さんがクラシック音楽の解説をしたり、講演会や映画会が終わってから、問題点を絞ってディスカッションを行ったりして、見たり聞いたりしたことが身になるように配慮されていた。

これらの文化的事業は、アメリカを紹介する講演会、映画会、日本人には耳新しかったバーンスタインのレコードを聞かせる会など、アメリカを知らせるためのプログラムに力が込められていた。

感心するのは宣伝力だ。毎週ラジオではセンターの行事が放送され、新聞にも毎週掲載されており、神奈川新聞には「横浜CIE図書館便り」の小さな欄が毎週掲載されていた。ポスターは駅や市電、バスの中にも貼り出し、他のセンターのことだが銭湯にも貼り出したというメモを見た時は、そこまでやるのかと驚いた。新しいセンターがオープンする時には宣伝カードで市内を回ったなどの記録もある。

英語教室はどこのセンターでも大盛況だった。横浜でも英語のクラスが増え、先生には館長や英語のできる日本人職員では足りず、占領軍将校の夫人たちで教育経験のある人たちがボランティアで先生を務めた。高校の英語の先生を対象とした英語教室、神奈川県庁の職員を対象にした英語教室は内山知事の肝煎りだったので「知事の英語教室」と呼ばれていた。

四九年末に東宝映画が、横浜センターのペンパルククラブの活動を中心に映画を製作し、「Pen Friends」というタイトルで五一年五月十六日にセンターで上映され、横浜センターのペンパルククラブは一躍有名になった。どこかにこのフィルムが残っていないだろうか。

一九四九年十一月、日本の各県に置かれていた地方民事部（旧軍政部）が縮小され、民事部が開設していた読書室のうち、一部はCIE図書館の分室となり、他は設置されている地方自治体に委譲された。

神奈川県では、小田原、鶴見、弘明寺、川崎、相模原の

五カ所の民事部読書室を横浜センターが引継いで、分室とした。鎌倉は民事部が大仏の裏にカマボコ兵舎を提供して分室を開いたが、利用が少なく短期間で閉鎖になった。横須賀は市立図書館の中に分室がオープンした。横浜センターのサービス範囲は神奈川県に止まらず、山梨県、静岡県にも広がっていた。

一九五二年四月二十八日に占領が終結し、占領軍が引揚げた後、CIEインフォメーション・センターは陸軍省の管轄から国務省の管轄に移されて、アメリカ文化センター（ACC）と改称され、五月初旬に館長も職員も資料も継続して再開された。

横浜では占領が終結した以上、海員会館を接収しているわけにはいかず、横浜ACCは五三年、中区山下町の南里貿易ビルに移転した。五二年八月に新宿ACCが閉鎖になり、その資料を横浜ACCが引継ぎ、重複している資料は近隣の大学や個人に寄贈された。五七年横浜ACCは山下公園の側に再度移転した。

東京のACCが、赤坂見附のかなり大きな山王グラウンドビルに入居したことから、地理的に近い横浜ACCを統合することになり、横浜ACCは六七年二月二十五日に閉鎖された。当時のドノヴァン館長はACCの蔵書を神奈川県立図書館に寄贈することを申し出た。洋書は約一万五百冊、和書約二千五百冊、雑誌二十六タイトル、パンフレット二万点であった。成瀬館長の英断でACCの蔵書すべてが県立図書館に引取られた。それが現在県立図書館に置かれているACC文庫である。

ACC文庫のように、当時のアメリカの図書が保存されている所は少ない。現在のACC文庫は、ACCから寄贈された当時のままというわけではないが、それでも一九四〇年代から六〇年代のアメリカの出版物が多数保存されている。CIE・ACCには、小説などの読物だけでなく、アメリカを代表する広い主題分野の出版物が丁寧に選択され収集されていたのだ。ACC文庫を利用することによって、良い論文が書けるのではあるまいか。ACC文庫は、

ネット検索ができるので、利用することをお勧めしたい。

文中で紹介されているACC文庫については、当館（連絡先は奥付）にお問い合わせください。（編集担当）

注

- (1) 対談者…石井富之助・團野弘之・小林恒男（司会）「シリーズ 対談・先輩に聞く（第一回）戦前・戦後の神奈川県図書館事情 その二（戦後編）」『神奈川県図書館学会誌』六十五号 一九九〇年
- (2) 今まど子「SCAP/CIEインフォメーション・センター…横浜」『中央大学文学部紀要 社会学・社会情報学』二十二号 二〇二二年
- (3) 前掲(2)

参考文献

- * 『神奈川県立図書館・音楽堂20年史』神奈川県立図書館・音楽堂編 神奈川県立図書館・音楽堂 一九七四年
- * 沓掛伊左吉「横浜アメリカ文化センターの開設から閉館まで」『神奈川県図書館協会報』六十一号 一九六七年
- * 小林恒男「戦後の歩みⅠ CIE及びACC図書館」『横浜の本と文化』横浜市中央図書館開館記念誌編集委員会編 横浜市中央図書館 一九九四年
- * 石原真理「横浜アメリカ文化センター所蔵資料と設置者の意図」『日本図書館情報学会誌』五十六巻一号 二〇二〇年